

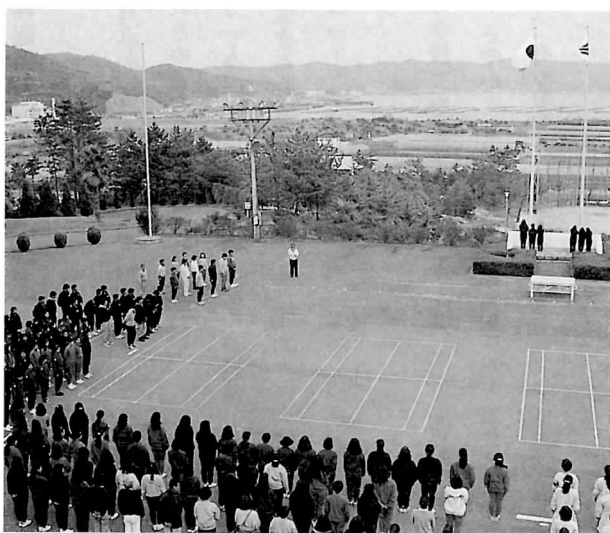
贈る言葉

—— 生きているのではなく生かされている ——

寒梅が、風雪に耐えながら春に開花するように、皆さんは比治山女子短大での二年間苦難をしのびながら研鑽を積み重ねて、いま、晴れの卒業の日を迎えになりました。まことにめでたい限りで、心からの祝福を贈ると共に、その精進に敬意を表したいと思います。

贈る言葉

さて、卒業証書を頂くということは、みずからの力だけで出来るものではありません。慈しみ深いご両親をはじめ、多くの方々のお力添えがあってはじめて得られることだと思います。ことほどに、私達は、人の恩恵なしには事を成すことも生きていくことも出来ないのです。いま、新しい二十一世紀に向



江田島青年の家におけるリーダートレーニング

って旅立とうとされている皆さんは、このことをしっかりと再認識し、日々感謝の人生を歩んで頂きたいと思います。

思うに、二十一世紀は、間違いなく国際化が進み世界が身近になってくることでありましょう。洪水の氾濫するように迫ってくる情報への正しい判断力や、諸外国の人との意志疎通のための語学力も、いよいよ大切になってくると思います。しかし、それよりも、この私は、自分一人で生きているのではなく万恩あって生かされているのだ、という謙虚な気持ちに立ち返って、感謝と奉仕に生きる心根こそが大事ではなかるうかと思うのです。

ところで、去る一月一四日のNHKテレビ「日曜インタビュー」で観たことですが、そのインタビューに応えられた中田正一さんはそうした心根の一人だと思うのです。

中田さんは、もと農林省にお勤めでしたが、いまは「風の学校」を主宰され、農業を通して人間教育を世界に実践されておられる方なのです。その中田さんの心の底で、さやかに息づいている謙虚な感謝と奉仕の精神は、はるか中学時代から培われていたと思われるのです。そして、その契機となったものは、「アルプスを越える三人の少年」という英語の学習にあったのです。

そこに登場する三人の少年、ABCは、一週間の日程でアルプス越えに挑戦したのですが、その最後の夜のこと、予期しなかった吹雪に遭遇し、加えて仲間の一人C君が倒れるというアクシデントに見舞われました。そのとき、A君は、C君をB君に押しつけ、自分はその危険から逃れようとひとり下山していったのです。とり残されたB君は、勇を鼓してC君を励まし抱きかかえて下山しはじめたのですが、その途中、A君の凍死体を発見し

たのでした。ここで、B君は考えました、「この寒風すさぶ雪中で、凍えもせず生きておられるのは、外でもないC君の体温のお蔭である」と。助けていると思っていた自分が、実は、かえって助けられていたのだと気付いたのです。

ここに、「助けているのではなく助けられている」と気付いたB君の感慨は、「生きているのではなく生かされている」というようにいい換えてもよからうと思います。中田さんが、生かされていることに感謝し、農業改良普及という形で世界に奉仕されているその精神は、こうして、中学時代から培われていたと思うのです。

実際、私達は、自分だけで生きられるものではありません。数えきれない多くの人々のお蔭によって生かされているのです。

私は、近年、朝はパン食にしておりますが、そのパン一つをとってみても、それが私の口に入る迄には、先ず小麦を作る人、それを粉にする人、その粉を運ぶ人、そしてパンを焼く人、それを売る人というふうに、数知れぬ多くの方々の恩恵があつてはじめて口にすることができなのです。

このように考えてきますと、人間は、生・き・て・い・る・の・は・な・く・生・か・さ・れ・て・い・る・の・だ・と・思・う・の・で・す。多くの人々のお蔭によってはじめて生かされているのです。

いよいよお別れするわけですが、私は最後に「生かされていることに感謝しながら謙虚に生きよう」という言葉を送りたいと思います。そしてそれを、共々人生の指針としてゆきたいものと念じております。お元気で。

比治山女子短大新聞（平・2・3・15）